

令和6年度第1回
奥州市総合教育会議
会議録

令和6年6月25日開催

奥州市

1 開会、閉会等に関する事項

開催日時 開会 令和6年6月25日（火）午後3時30分

閉会 令和6年6月25日（火）午後5時

開催場所 本庁3階303会議室

2 出席者の職及び氏名

倉成 淳 市長

高橋 勝 教育長

高橋 キエ 委員（教育長職務代理者）

菊地 幸 委員

佐々木 哲也 委員

3 説明のため出席した職員

（協働まちづくり部）

千葉達也協働まちづくり部長、千葉学生涯学習スポーツ課長

（教育委員会事務局）

高橋広和教育部長、松戸昭彦教育総務課長、吉田博昭学校教育課長、菊池長学校教育課主幹

（事務職員出席者）

千田俊輔教育総務課長補佐

4 主要議題

まちづくりと教育

5 協議の概要

開会、市長・教育長挨拶、主要議題の協議

第1 開会

高橋教育部長が開会を宣言

以降、高橋教育部長が進行、第4及び第5については倉成市長が進行

第2 市長挨拶

この総合教育会議は、市長及び教育委員会が、本市教育の課題や目指す姿を共有し、一層の連携を深めながら本市教育の振興に取り組むため、教育に関する諸課題について協議・調整を行うものである。

今までは、アウトプットが明確ではなかった。今回のテーマであるまちづくりは市の課題に直結するテーマである。例えばメイプルの再生に対する考え方や学校統合後の旧校舎の活用の方法などいろいろな市の課題があるので、市の施策に反映できるような、また、来年度の予算に反映できるような協議ができればと思っている。

委員のご協力をお願いします。

第3 教育長挨拶

本市教育の振興に取り組むためには、市長及び教育委員会が一層の連携を深め、共通認識や課題解決の方向性を探り、本市の子どもたちや市民が「このまちに住んでよかった」と思えるよう、あるいは将来の夢を実現できるよう、しっかりと学びの場を提供するための取り組みを展開していく必要があると考えている。

教育委員会では、児童生徒の「郷土愛」を醸成するとともに、将来に夢や希望を育むことをねらいとした「ふるさと学習」を今年度から進めることとしている。奥州市を深く理解することにより、親しみを感じ、誇りをもつとともに、「ふるさと奥州」への思いをもち続ける「郷土愛」にあふれる児童生徒を目指し、「まちづくり」に繋がる「人づくり」を進めてまいりたいと考えている。

委員の皆さまから様々なご意見を頂戴できれば幸いである。

第4 協議事項

テーマ「まちづくりと教育」

吉田学校教育課長が資料の説明を行った。

【協議】

倉成市長：委員の皆さまから御意見をいただきたい。

佐々木委員：元々教員であり、現職時代に言えなかったこと、言いにくかったことがあったが、こういう立場になり今まで感じてきたことを話したい。まちづくりと教育を両面からとらえた。まちづくりに対して教育はどのような貢献ができるのか、また、教育にとって、どのようなまちづくりが望ましいのか両方から考えてみた。

前提として、現在の子どもたちの現状を見ての課題として、不登校児童生徒が年々増加傾向にある。その要因としては、無気力、不安感が多い。2、3日前のニュースで、国際的な調査によると日本の青少年は他国に比べて自己肯定感がかなり低いと報道されていた。調査を実施した先進国の中では日本が最低だった。この部分が昔から気になっており、子どもたちの学習に向かうベースとして、無気力である、夢がない、目標を持っていないなどエネルギーになる根本がない子どもが多いというのは、何をやっても難しく、効果が出にくいだろうと感じていた。現在の子どもたちは将来の地域を担うべき人達であり、将来に対して強い不安感を持っていたり、無気力な日々を送っていたりすることは、今後の地域全体の活性化にはなかなか繋がらないだろうと心配する気持ちである。こういったことを何とかできないか、何か方策はないかと考えた。まず、まちづくりに向けた教育の役割として、課題を少しでも改善する方向に向けていきたい。子どもたちに将来の夢を持って、日々を大切に生活してほしい。これは難しいことだと思うが、子どもたちと一緒に生活していると、子どもたちが夢を掴むきっかけとなっているのは、人との出会いが多いように感じていた。夢を追いかけて頑張っている方が身近にいと、その姿に触れ、将来あのようになりたいと思ひ、努力をしたいと思うようになる子どもが多かったように思う。大谷君は本当に最大の憧れの人であり、身近な存在であれば、子どもたちにとっては自分自身もよしや

ろうという気持ちが出てくると思う。市のふるさと学習もとても大事なことでと思う。もう1つ加えて欲しいのは、現在奥州市の中でいろんな課題に挑戦して夢の実現に向けて頑張っている人たちを子どもたちに紹介できたらなと思う。そういう方たちと子どもたちが触れ合う機会があれば、子どもたちも何か感じることもあり夢を持ち希望を持ってくれるのではないかなと思う。そして、将来の夢を掴んで挑戦しようとする意欲も育つのではないかなと思う。自己肯定感を高めるとか、やる気を起こさせることは簡単なことではないが、そうした憧れを持てるような人との出会い、触れ合いは、大きなきっかけになるのではないかなと思っている。

子どもたちが学校でどんな力を身につけ、卒業後に地域でどのような活躍をする人に育ってほしいのかという親や地域の方々の思いや期待を教職員がもっと理解しておく必要があると思う。これまでも教育振興運動とかコミュニティスクール事業とかの機会を通して学校と地域の協働や連携は行われてきたが、もう少し意識して踏み込んだらどうなのだろうと思う。管理職は割と地域の代表の方々と話し合う機会があり、ある程度は地域の方々の願いなどを理解できていると思うが、一般の先生方はなかなかそういう機会がなく、生活が忙しいため、地域行事に住民として参加することも少ないように思う。先生方が現職時代からもっと地域の方々と打ち解けて交流をして、地域の方々の思いや期待を理解すれば教育の質が少し変わってくるような感じがする。そういう機会を意図的に設定していくことも必要だと思う。

教育や子育てにとって地域に求められるものについて、昔から感じていたことであるが、学校教育の出口をもっと強く考えてほしい。それぞれの地域で学校を卒業した青年たちが活躍できる機会、場が少ないのではないかなと思っている。これは、奥州市だけの問題ではないが、これからどんどん日本の人口が減少し、人が足りなくなってくる。加えて地方都市の青年たちは、どんどん都会、都市部に移り住む。その理由は様々あると思うが、子どもたちに聞くと、将来ふるさとに住み続けたいと思っている子どもがかなりの数いる。しかし、現実問題として卒業後に、自分がやりたい仕事や自分の夢を実現できるようなチャンスが本当にあるかどうかということが大きいのかなと思う。やむなくふるさとを離れていくという青年たちは、相当数あるように思う。特に、高等教育を終わった青年たちは、地元での就職機会が少ないように感じている。せっかく学んだ高いレベルの知識や技能を生かす場がふるさとにないというのは、本当に残念なことではあると思う。そういう企業、会社を増やすのは難しいことだが、最近いいなと思うのは、学生の頃から自分で起業し、やりたい仕事を作っていく青年たちも全国的に見られる。若い人たちがどんどん自分のやってみたいことに挑戦できるような環境を整えていければと思う。例えば、メイプルの活用にしても、若い人たちがいろいろな仕事を作っていく、いろいろなことにチャレンジするメッカのような使い方も面白いと思う。

他の市町村で東京から家族で移り住んできた生徒がいたが、その家族から岩手の教育は駄目だと言われた。全然教育予算が足りないと言われた。学校図書館の充足率にしても、東京都は基準の100何10%も200%もあるが、岩手県

の市町村の充足率は、7、80%というところもある。担任など必要な先生の人数は国の基準どおりであるが、それ以外の支援をする先生の人数は比べようがないと思う。今いる先生方で精一杯頑張るということで理解していただいた。東京と競争する必要はないが、学校の状況を見れば、いろいろな面でもう少し予算あればという気持ちはあった。

菊地委員：私は江刺に住んで約15年となり、江刺で子育てをしている。江刺甚句まつりという大きい祭りがあり、ゴールデンウィークのど真ん中の開催だが全小中学校が登校日になる。それを初めて知ったときにすごく思い切ったことをやったなと感じたが、江刺の人はそれが普通なので、ゴールデンウィークは長期連休を取って旅行に行こうというよりも、地元でその祭りをみんなで盛り上げるというようなまちづくりになっている。それは、まちづくりと教育との融合の1つの形でもあり、市と教育委員会の連携したまちづくりと教育のモデルなのかなと感じた。江刺の子どもたちは年に1回のお祭りといえども、小中9年間は江刺甚句まつりに参加することになっているので、大人になってからもこの時期になるとふるさとを思い出し、鹿踊りの太鼓の音なども結びついて思い出すと思う。ふるさと学習とまちづくり教育とが一体となっている形なのかなと思った。まちづくりは人づくりということを考えると、キャリア教育はとても重要だと思っており、将来的に地域を担う人づくりでもあり、昨年、胆沢中学校の学校公開研究会に参加したときに、技術の授業で、みんなが同じ棚を作るということではなく、それぞれ自分の家の写真を撮ってきて、この家のこのデスクのこの場合にこういう問題があるから、ここにこういう棚を作ってこの問題を解決してというように自分でプレゼンするような場面があり、それは授業に取り入れられているキャリア教育だなと思い、すごく感動した。キャリア教育の事業だけではなく、あらゆる教科の中で実生活に繋がるような教育、目的を持って主体的に取り組む教育、課題を見つけて解決策を考えて計画をするというものをもっともっと取り入れてもらえると、将来的に会社においても地域においても使えるスキルになるのかなと思った。まちづくりは人づくりということを考えると、その視点を学校でも取り入れていると思うが、さらに繋げていてもらいたい。すごく簡単な単純なことでもいいので、例えば日本語を使う人口は1億人だとして、英語は中国15億人が使っているなど、ちょっとヒントをもらうだけでも、自分の世界が広がったり、将来的な自分の活動フィールドが広がったり、英語に関して興味も持ったりすると思うので、大事なところかなと思う。

今は私たちの人生が教育、仕事、引退という3つのステージから、生涯学び続けるマルチステージができており、リカレント教育や学び直し、主体的に学びなさい、企業もそれを支援しなさいという形になってきており、人口構造の変化もあり女性も高齢者も活躍しなさいという世の中になってきているので、生涯学び続けるという意味合いで生涯学習の役割は大きいと思う。とは言え、発達段階やライフステージによって必要な学びは変わってくる。生涯学習スポーツ課でもライフステージごとの教育の提供というのは今もされていると思うが、まちづくりに繋げることを考えたときに、1つには壮年期の40代から65歳まで、40代50代が人生の正午というタイミングで残りの人

生を意識する世代とも言われているが、子供が自立して第2の人生、自分から仕事を取り除いたら何が残るだろうなど、組織内のキャリアから生涯のキャリアへ移行するタイミングでもあるので、新たな学び直しとか社会やコミュニティとの繋がりを求めていくタイミングでもあるのかなと思う。そういう世代は人数が多い世代でもあるので、20年後を考えると、この世代を活用し、まちづくりにうまく移行できるような形があると良いのかなと思う。65歳以上の老年期は、仕事、健康や家族を失ってきて、生きがいや生きる目的までも失わせないと言われているが、私の知っている方で体操教室をしている79歳の女性がいて、ものすごく元気で地域貢献している。そこには旦那さんを亡くした未亡人が多く集まるが、そういう意味でも貢献している。この方が何でこんなに元気なのだろうというのを観察すると、知識力がすごく、学びたい、成長したいという思いを79歳の今でもすごく持たれているので、こういう世代の希望を持ったり、目標を持ったりするということにも力を入れてもいいのかなと思う。

今、多様化とか多様性とかが尊重される社会になってきて、それは自由で生きやすい反面、不干涉を生むとも言われており、国でも孤独対策というものにも力を入れてきているので、問題化しているということだと思う。奥州市でも、そういう問題にも教育、生涯学習というものは関わる余地があるのかなと思う。

高橋委員：まちづくりを考える上で人づくり、人材育成が一番大事だろうと思う。生涯に渡ってのステージ、学びの場というのがあると思う。教育委員としてすごく気になるのが、不登校の子ども数が増えていることである。不登校やいじめの事例が増えていることがすごく気になる。特に、低年齢化で、何年か前までは小学校の1年生、2年生には出てこなかった数字が出てきている状況がある。これは一体どういうことなのかなと思ったときに、昔と違って核家族になっているということもあり、子育てをするときに孤立しているお母さん方もいるのではと感じた。生涯に渡っての学びといった場合に、赤ちゃんがお腹にできた時点から親としての学びがスタートするのかなと思う。今はインターネットを見ればいろいろな情報があり、逆に多いぐらいでどれを選択したらいいか悩むこともあるかと思う。そういう情報はあっても、悩むお母さんたちもいるのかなと感じている。昔だったら、おじいちゃん、おばあちゃんと同居する大きな家族の中で子育てをした大らかな時代もあったが、今はなかなかそういう時代ではない。乳児健診や妊婦健診のときにも家庭教育の大切さを伝える機会を持つことが大事だと思う。また、不安に思っているお母さん方の声を聞いてあげられる、相談を受ける体制も考えていただければいいのかなと思う。誕生から幼稚園、保育園、小学校、中学校と繋がるが、小学校、中学校の不登校に同じように登園渋りという言葉も聞く。そこでお母さん方が、なんで保育園、幼稚園に行きたがらないのだろうと悩む場合もある。様々な場面で不安を抱えている親たちに対するサポート、そういう場を提供する仕組みがあったらと思う。幼児教育施設においても、支援が必要な子どもが増えており、その支援員や専門の方々の配置もすごく必要になってきていると思う。十分配置を考えなければならないと思う。

小中学校で不登校が増えている中で、特別な支援が必要な子どもたちも多くなっている状況がある。学校訪問をしても先生方が一生懸命子どもと向き合っている姿を見ている。たくさんの業務を抱えている中で、子どもたちに向き合っている。働き方改革が進められているが、もっと健康的に心に余裕を持って、笑顔で子どもたちに向き合えるように先生方の負担軽減も、もっともっと進めていかなければいけないと感じている。支援員やスクールカウンセラーの配置、ICT教育のためのサポートなど配置されているが、佐々木委員が岩手の教育予算が少ないと話したとおりだと思う。もっともっと予算を増やしていただければ、もっときめ細やかで先生方の業務の負担軽減にも繋がるような学校教育ができるのではないかと。先生方の負担軽減のために、学校支援地域本部事業ある。ボランティアとして参加する地域の方がたくさんいるようだが、まだまだやってみたくて思っている方もいるようである。知らない方たちもいる。そういう方たちに協力してもらい、学校の先生の負担を軽減できることは進めていただきたいと思う。

自分の住んでいるまちを誇りに思う、自分が住んでいるまちが好きだと思えることは、すごく素晴らしいことだろうと感じている。そういう思いが大学や仕事でまちを出て行ったとしても、帰ってきたいとか、ずっとここに住みたいとか、そういう気持ちに繋がるのかなと思う。それには住んでいる私たち自身が、大人も心からこのまちを好きにならなければいけないと改めて感じた。笑顔で暮らしていることを子どもたちにもっと伝えなければいけないと思う。そういう意味では、ずっとこのまちに住んでいると、奥州市の良さになかなか気づかないでいる部分があるのかなとも思う。奥州市に移住した方が奥州市の魅力を評価しているのを聞くと、私たちが気づかないところが魅力だったのだと改めて気づくこともある。そういった方たちとの交流も含めて、私たち大人も奥州市の良さをもっともっと分かって、子どもたちに伝えることができると感じた。

学校訪問をすると奥州市の子どもの特徴で自己肯定感が低いと言われることがある。大人である私たちも悩んだり失敗したりすると、ネガティブになることはあると思う。そこから立ち直る力を付けることが大事で、それが生き抜く力に繋がると思っている。それにはいろいろな体験が必要である。最近、体験学習が少なくなってきたと感じる。何か困難なことにぶつかると、なかなか乗り越えられなくなってきたと思った。ふるさと学習にも繋がるのかもしれないが、体験を中心とした学習をもっともっと増やせないのかなと感じている。今まで農業体験などもやられてはいるが、近所を見ても、ちょっと前までは子どもたちが自分の家の田んぼや畑の手伝いをしている姿が見られたが、今では全然見られなくなった。学校での農業体験は難しいかもしれないが、例えば1年間を通して米ができて上がるまでとか、畑で野菜が収穫できるまでとか、流れの中の農作業体験もいいのではと思った。実際やられてことではあるが、市民劇場に子どもたちが子役として参加する場面がある。たくさんの大人と1つのものを作り上げ、それを一緒に喜び合い、達成感を感じ取ってくれているのかなと思う。それが自分の住んでいる

まちを好きになるきっかけになり、自分も地元のために何かをしたいという思いにも繋がるのかなと感じている。同じように郷土芸能への参加ということで、江刺の伝統文化親子教室の新聞記事があった。そのような形で郷土芸能に参加することが伝統芸能の後継者の育成にも繋がり、大事な体験なのかなと思う。地域の歴史、伝統や文化だけではなく、様々な場面で体験できることがあればいいなと思った。

奥州市には図書館運営協議会がある。それぞれの図書館の運営について語り合う会のようなものに、小学生や中学生が利用者として参加し、こういう図書館にしてほしいなどの意見を言う。こういったことでまちづくりに参加することにも繋がるのかなと感じた。

子どもたちが自分のこと、自分が住んでいるまちを好きになるようにするため、大人も一緒になって考えなければならないと感じた。

倉成市長：委員から出されたポイントについて質問があればお互いに出していただき、教育委員会からもそのポイントに対して感じることをあれば発言をお願いします。

高橋教育長：ふるさと学習の経緯について、私が就任した年の全国や県の学習状況調査などの子どもたちの状況を確認したときに、大きな課題だと思ったものがあった。「自分の住んでいる地域にはよいところがありますか」と「将来に夢や希望を持っていますか」という設問について、全国と比べると良いが、県と比べると低かった。その年度だけではなく、経年でおしなべて低かった。これは何だろうと思い地域ごとに調べたところ、地域によって大きな格差もあった。「自分の住んでいる地域にはよいところがありますか」という設問に極端に高い地域と低い地域とがあり、調べたときに、地域に関する学習の差に行き当たった。旧市町村単位でいろいろやっており、いろいろな教育資源などが豊富な地域との大きな格差が出ていてきたのかなと感じた。旧市町村ごとに地元の学習はやっているが、奥州市全体に広げると、例えば「三偉人って誰ですか」、「天文台って何ですか」などと言う子どもたちがいる状況がある。地域全体の理解が進んでいないため、いいところもあると思っていないのではないかなと思う。これを何とかできないかなと感じ、何とかふるさとに関する学習させたいなと思ったのが始まりである。このようなことをやることによって、地元や地元でなくても市全体の理解が進めば、将来的にまちを出て行ったとしても奥州市にルーツがある子たちが作れる、そういった基盤ができると思う。学校教育の中ではそこが担うだろうと思う。そのようなことを学習することにより、奥州市全体に興味を持ってまちづくりに興味を持つ子がいるかもしれないし、将来的には条件が合えば戻って仕事をやりたいなと思う子がいるかもしれない。そのような気持ちが根っこにある子たちが育てられればいいなということがあり、仕組みを作ってみようと思ったところである。まちから出て行っても将来戻ってくるには、小さいときに学習したふるさとに対する理解や郷土愛が必要だと思う。また、羅針盤プロジェクトなどによる市の魅力づくりで戻ってきたいまちになっていれば、多くの子どもたちはまた戻ってくるのかなという感じもあるので、受け皿的な部分も一緒に連携しながらできれば、いいのかなと思った。

キャリア教育として職場体験を2年生の段階で3日間は必ずやっている。学校単位で職場を探すため、自分の住んでいる職場や近所のエリアしか行かないので、例えば水沢の学校の校長先生に聞いたところ、江刺の工業団地にどんな企業が入っているのか全く理解をしていなかったことに愕然とした。大きな企業入っていて、いろいろな職業を見たり聞いたりできる機会があるが、先生方が知らないこともあり、体験させるエリアがちょっと狭まっている。ふるさと学習の延長線上にキャリアがあるので、何か仕掛けができないかなと思う。企業の関連もあって、市長部局と連携していけないかなと思っている。

まちづくりの観点で言うと、古戸の小さい広場が活用されていないので、衣川中学校で総合的な学習の時間でプロジェクトを組み、地元の人や市職員にも来てもらい、案を出して装飾などしたところがあった。中学生でもまちづくりの疑似体験のようなものぐらいはできるのかなと思う。地域の小さいものに関わって貢献することもできると思っている。いいことであればいろいろな学校にも波及させることが可能かなと思っている。市長部局と連携できる部分や協力いただく部分はたくさんあり、いろいろ可能性があると思っている。

倉成市長：ふるさと学習を新たに始めたことは、具体的にどういう項目なのか。

高橋教育長：先般、編集のための人を集め、原稿を作成し始めたところである。

テキストの完成まで約2年かかる。かなりボリュームのあるもので、多岐に渡って環境、歴史、文化、職業的な部分など全ての人に対応できるような形にしようと思っている。

倉成市長：その取組として冊子作りがあり、更にアクティビティがあるのか。

高橋教育長：学校でどの程度取り上げるかにもよるが、小学校3年生から中学校3年生までで、冊子を使い調べたり探究したり、また、実際行ってみたり、自分たちで調べて発表するなどを考えている。どのように活用するかも一緒に検討しているので、先生方向けの指導のテキストのようなものも一緒に作ろうと思っている。それがなく、いきなり学校に預けても動き出せないのも、これから検討したい。

倉成市長：ICT教育とふるさと学習を一緒に預けられたら、教師が困るのではないか。

高橋教育長：たくさんの時間数をかけるのではなく、学校でも計画を立ててもらうが、総合的な学習の時間の一部を使うとか、研究的な部分であれば夏や冬休み中の課題に与えるとか、朝学習のような時間帯で調べ学習をすれば、やり方はたくさんあると思う。

倉成市長：できればICT教育を合わせられると良い。例えば綺麗な花があって、それを撮ればそれが何か端末に出てくる。そのように実際に経験できる場を作れば良いと思う。

高橋教育長：1人1台端末があるので、それを十分活用できる。冊子はあるが、端末に格納できる部分は格納したい。最近の教科書は各ページにQRコードがあり、そこからいろいろな資料にアクセスできる。このような形が使い勝手が良いと思う。

倉成市長：それもこれからの生きる力だと思う。

高橋教育長：冊子の中だけで格納できないものもあり、興味があればアクセスできるようなものだといろいろな調査、活動に活用できる。現地に端末を持って行くことも可能である。

倉成市長：他に何かないか。

佐々木委員：私は長年社会教育に携わり体験活動を中心にやってきた。生徒たちの生活時間も忙しく、体験活動の時間を確保するのが難しくなっている。私の自治会の区長が、農事法人を作って地域の水田を全部集約して米づくりをしている。ただ、その組合員全員が70歳以上である。何とか後継者を作りたい。私は自治公民館長で公民館の事業を年に1回か2回やらなければならないが今年は子どもたちに体験活動をやらせたいと考えている。農作業体験が一番やりやすいと思っているが、一般的な農業体験は手植えや手で稲刈りをするなど昔の形を伝えたいというのが多い。私は逆に最先端の農業を子どもたちに体験させたくて、区長に子どもたちをコンバインに乗せての稲刈りをできるか尋ねた。すると、「面白い、やろう」となり、秋になったらコンバインで子どもたちに稲刈り体験をさせる。できればドローンで除草などをやらせ、「農業って面白そうだな、やってみようか」という気持ちになってくれないかなと思う。将来の地域づくりを子どもたちに早く見せてあげる取組をしていきたいなと思っている。

倉成市長：それが生業づくりだと思う。昔の農法だけだったらノスタルジックなところで止まってしまう。自分がそういう職業に就きたいかどうかというのは、そういうことだと思う。これだと未来があるなという印象を付けられるかどうか重要だと思う。

高橋教育長：職場体験の選択肢の中でスマート農業を体験できると、将来の職業に選択する可能性はゼロではないという気はする。

倉成市長：今、スマート農業は結構進んでおり、先行投資が必要だが全く素人の高卒の人が、農機具メーカーのカリキュラムに入ると、一般の農家の7割ぐらいの収量が取れるそうである。すると、7割、8割、9割となると数年で生業が成り立つ。過去の農業だと絶対にそういうことはあり得ない。そういう時代になったことを感じてもらえるような場が必要になっているだろうと思う。

千葉協働まちづくり部長：普段から気になり心配になっている部分があるので、ご意見をいただきたい。義務教育前の保育所、認定こども園などの支援で、全国的に子育て支援、待機児童解消のために、待機児童ゼロを打出して力を入れているが、これが将来的に逆に悪影響が出なければいいなと思っている点もある。保育所は40年前からずっとやっていたが、当時は保育所といっても2歳ぐらいから入ったが、今は、早い人は生後3か月ぐらいで施設に預けられる。0歳児の待機が多いため、施設を増やしてくれ、先生を増やしてくれということで、それに応えるために現場は動いている。アメリカの研究で、生まれてから2歳ぐらいまで親と一緒に育たないと、目が見えない、耳で感じる親の匂いで、そのときに脳が形成されるという論文がある。かつては両親が働いていると、おじいちゃん、おばあちゃんが面倒を見た。今はそれも

ないので、全部保育士に任せる部分が大分多くなってきている。保育能力がない親が増えてきて、発達支援センターで親の教育をしているということが出てきている。自己肯定感などは脳ができるときからの積み重ねであるから、将来に影響が出るのではという心配がある。受け入れなければならないが、乳幼児の子育てにもっと支援するには、本当は施設に預けるのではなく、育児でしっかりと両親で育てるなど国では制度を出しているが、無償化だと入れた方がいいなど、それが心配なのでそれをもっとよくするためには何が違う方策も考えたほうがいいのではないかと思っている。

部活動が任意となり、部活動をしない生徒が増えていると聞く。江刺甚句まつりが思い切ったことをやったというのはそのとおりである。江刺甚句まつりは、新しくまちづくりのために始めたお祭りで、歴史、伝統はそんなにない。昭和49年に市、商工会、議員などが当時は岩谷堂のまちの活性化のために始めた。岩谷堂以外の地域は参加しなかった。それが何十年の積み重ねでようやく定着し、岩谷堂以外の小学校も中学校も練習して全員で出るぞとなった。踊りが嫌な人もそれ以外は出て、自分たちが42歳の厄年になったときに、当時もみんなが出たなあという話もできた。甚句まつりに参加しなくて、お祭り会場でゲームをしたり食べたりする人が当時もいたが、ある意味の強制的なことをできたから、親も先生も付いてくる。同級生である中学校の先生に江刺に赴任したら連休がなく、こんな地区は初めてだと言われた。それは、江刺はそういう地域だと長い積み重ねで定着し、教育をしながらまちづくりも関係したというのがあるので、部活動が任意になったが、ある程度強制というか、みんなでやりましょうというようなものがなくなると、本当に多様化、自由だけでいいのかなという心配を感じている。

倉成市長：多様化の弊害というのは確かにあるだろう。一見認め合っているように見えるが、最終的には孤独化に進んでしまう。そこは、どこかで歯止めをかける必要があると思う。甚句まつりも最近参加者が減ってきた。それは、ゴールデンウィークに家族で出かけたという人が増えている。強制力が働かなくなると大変だろうと思う。

佐々木委員：昔は青年会がほとんどの市町村にあり、そこで学校を卒業してから親になるまでの間も大事な学習をしていた。その青年会が今は全国でなくなってきた。青年会がなくなったことにより、学校を卒業してから親になってPTAに入るまで、全くどこの組織にも所属しない青年たちがいる。行政がそういう人たちにアプローチする方法がない。親になるための学習の機会を提供したいが、どのように集めればいいのか、どのように声かけたらいいのかすごく悩ましい。親になる前の親になるための学習はとても大事である。それをこれから作っていければと思う。

倉成市長：40代、50代の新しい学び直しという話があった。例えば、子育てもひと段落したから新しい個人のビジネスを作りたいという人たちが実際にいるのかどうか知りたいと思っている。何かやろうとした場合に、そんなことできないだろうと止まっている人達が多いと聞くが、実態はどうなっているのか。

菊地委員：全てを知っているわけではないが、私自身も学び直しをしたいと思

っている。東京に勉強に行ったり、地元でもずっと手話を学んでいたりするが、生かす場所がないという友人たちがいる。まだまだ一仕事できる年代なので何かしたいと私も思っているし、メイプルのような気軽に使えるような場所があるといいなと思う。

倉成市長：そうだと思う。スモールビジネスを始めやすい環境を行政が手伝うとすると生業づくりの1つはそれだと思う。それが何件か出てくると、まちづくりに繋がると思う。

菊地委員：横の連携ができるといいと思う。

倉成市長：40代、50代の方は横の連携を作るのがうまい人が多いのではないかな。

菊地委員：私が厄年連のとき、社長がいるなどある程度物事を動かせる年代なので、そこから何か横の繋がりがあれば発展するというイメージがある。

倉成市長：60代以上や団塊の世代は俺が俺がで育った人が多い。ネットワーク作りのうまい世代がそういう人たちを巻き込むような形になると、今いろいろやっている小さな拠点づくりの中でできる可能性がある。地域の人たちが集まり、ちゃんとした生業を持っている人たちを核にして、いろいろな生業ができる可能性はあると思う。今までボランティアでやっていた人たちが有償ボランティア、つまり参加することによりちゃんとお金も入り、社会に参加している意識が芽生えるのがすごく重要だと思う。生業にいかに関係するかというのは、奥州市のこれからの課題であると思っている。

いろいろな形でなるほどなと思う委員からの指摘であった。年代別に教育への関わりのある方やまちへの関わり方は違うと思う。かなり高齢の人がちょっとした助っ人になりたいという、微助っ人（ビスケット）という言葉がある。何かの形で社会に、まちに貢献したいひとが結構いる。今までは、まちな行事にボランティアで参加していた意識の高い人たちがいた。ところがなかなか行事がうまく回らなくなってきた、何かやることありませんかという人たちがいるのも確かだと思う。一方で、今回の学校の統合問題で明らかになったのは、地域の教育はいいものだと考え、これは小さい学校で残すべきだという考え方とサッカーチームを作れないような学校に置いてもしようがないという現実的な考え方がある。地元に残すべきだという人たちはスクールバスで毎日通わせたら何もできないという意見で、いろいろ世代間のギャップがあると思った。マイナス面、プラス面を分けるのではなく、どうにかできる方法が本当はあるはずである。学校統合という物理的な形で固めたが、例えば企業統合であれば統合した後の形を全部イメージして、統合の意味があることを考える。ところが、一旦統合して残った校舎をどう使えるかという議論が後から出るのは、もったいないやり方だと感じる時がある。とは言いながら空いていて使えるところを使ってみようという振興会もあるわけで、そこをモデル地区にしてどういうことができるか、自立できるような組織ができるのかどうか。農産物を売るという産直的な収入があり、農産物を加工して売るという収入もあるだろう。これからの時代だと今地区内交通をやっているが、それがライドシェアという形になるだろう。中山間地でも山林をうまく整備さえすれば、J-クレジットでそのCO₂をお金に換えてくれる。それは行政がやるが、それをきちんと管理する人がいれば、その地区

のお金になることが現実味を帯びているという中で、若いも若きも多世代間連携がその拠点で生まれると教育面でも随分違ってくると思う。同年代だと意見が合うが、他世代間の交流は、ひょっとしたら田舎でしかできない、田舎に残された教育の一番のメリットはそういうところにあるのではと思っている。まちづくりがそういうところにも影響を及ぼすことは大いにあり得ると思っている。これからは全部単一に同じことをやるのではなく、各地域で特徴のある取組をやってみて、これいいねとなったらそれを横展開するという時代になっていくのではなかと思う。そういうツールも皆さん持ち始めており、パッケージとしてこれをやってみようということが出来る時代になりつつあるので、そういう意識を持った、例えば30代、40代、50代のリード役の方やそれをサポートする60代、70代の方がうまく合流できるような仕組みができればいいなと思っている。

若い子どもたちが夢を持たない限りは、将来に希望を持ってないはずである。希望というのはどちらも「のぞむ」という文字であり、複数の望みが出てこない夢は持てないという感じがしている。

まちづくりと教育というのは、すごく幅広く深いテーマである。そういうものは正解がないので、チャレンジするしかないだろう。どこからチャレンジするかというのが各地域に課せられたテーマではなかと思う。

甚句まつりの良い例もあり、横展開の仕方も1つのノウハウだと思う。ノウハウを学び直しのところで学びながら、チャレンジする人たちがどんどん出てくる必要があると思っている。まちづくりに関してプロジェクトが動いているが、そこで課題がどんどん出てくるはずである。出てきた具体的な課題にどう対処するかという力が市職員も含めた市民に求められていると思う。そこを逃げずにできるかどうかというのがポイントだと思っている。市長部局でやらなければいけないことも多く、一番の問題は予算だと思う。予算をいかに有効に使うかというのは、単年度視点では絶対出てこない。長期でこういう効果があるはずだと自信を持って言えるものが優先にされるだろうと思う。教育関係の予算についても、そういう迫力を持って出していただければ我々もしっかりと考えることになると思う。正解はないところで協議することを覚悟しながら1歩1歩進めていこうと思っている。

一番重要なのは、有効に使える先行事例であるとか専門的な意識を持った方々の意見を聞くとかが時間を短縮させる1つの術だと思っている。まちづくりについては、そういう形で進めるのだろうと思っている。今日のテーマのまちづくりと教育ということに関しては、三位一体で動かなければいけないテーマだと思う。教育分野でいろいろ経験を蓄積した方々の意見が今後重要になると思うので、是非とも我々や教育委員会に助言していただければと思う。

第5 その他 なし

閉会